

# 福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	2. スコーピングレビューを参考にした成人期の口唇裂口蓋裂者に関する心理的な研究の文献検討 (一般演題, 福島医学会第500回学術研究集会抄録)
Author(s)	佐藤, 美保; 田中, 啓子; 高瀬, 佳苗
Citation	福島医学雑誌. 73(2): 51-51
Issue Date	2023
URL	<a href="http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/2168">http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/2168</a>
Rights	© 2023 福島医学会
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-04-30T07:41:20Z

## 福島医学会第500回学術研究集会抄録

日時：令和4年10月27日（木） 16:30～

場所：福島県立医科大学11号館 第1臨床講義室

### <一般演題>

#### 1. *Ab initio* 遺伝子軌道法による新規免疫チェックポイント *KYNU* / *kynureninase* の発見

福島県立医科大学看護学部生命科学部門

森 努

##### 【要旨】

免疫チェックポイント標的治療は、現代医学の中心課題である。しかし治療有効例は10%程度とされ<sup>1)</sup>、未知チェックポイントの存在が示唆される。だが激烈な競争にも関わらず、実験困難ゆえ、新規因子の特定は容易ではない。私は実験に拠らず遺伝子機能解析を行う *ab initio* 遺伝子軌道法を開発し、*KYNU* を特定した<sup>2)</sup>。

まず *STAIC* 解析では、*KYNU* の腫瘍関連性は肺腺癌と膵腺癌で1位であり、過剰発現が悪性度と極めて強く関連すると同時に、*PD-1* 経路より10～100倍もの高頻度変化が観察された。他の多くの癌種でも、発現過剰と悪性度に関連が見られた。さらに *ab initio* 遺伝子軌道法により、*KYNU* が免疫応答調節に強く関わること、*PD-1* 経路と相互排他的に関わることが判明した。加えて *SNP* 解析から、*KYNU* の治療標的性が示唆された。以上、*KYNU* を有望な治療標的性を持つ免疫チェックポイントとして報告する。

##### 【文献】

1. Haslam A, Gill J, Prasad, V. Estimation of the percentage of US patients with cancer who are eligible for immune checkpoint inhibitor drugs. *JAMA Network Open* 3(3): e200423, 2020. doi: 10.1001/jamanetworkopen.2020.0423
2. Mori, T, et al. Influential force: from Higgs to the *ab initio* genetic orbital method. *Jxiv*, 2022. doi: 10.51094/jxiv.156

#### 2. スコーピングレビューを参考にした成人期の口唇裂口蓋裂者に関する心理的な研究の文献検討

福島県立医科大学看護学部基礎看護学部門

佐藤 美保

一般財団法人慈山会医学研究所附属坪井病院

(元福島県立医科大学看護学部基礎看護学部門)

田中 啓子

福島県立医科大学看護学部地域・公衆衛生看護学部門

高瀬 佳苗

口唇裂口蓋裂（以下 *CLP* とする）は、口唇や口蓋が先天的に断裂している状態のことで、約500人に1人の割合で発生する。*CLP* 者は心理的な問題を抱えることで、社会的な生活を営むことができなくなる場合もあるとされているが、国内での *CLP* 者に関する研究は少ないといわれている。そこで先行研究を網羅的に調査し、明らかにされていない研究領域を明確にする手法であるスコーピングレビューを参考に、成人期の *CLP* 者の心理的な研究について文献検討を行った。

その結果、成人期の *CLP* 者の心理的な研究数は6件であり、心理的問題に関するものは3件のみであった。その内容は、*CLP* 者の自己認識や疾患認識、自己の意味づけに関するものであるが、心理的問題の全体像については明らかにされていないことがわかった。

このことから、成人期の *CLP* 者の心理的な問題の全体像に関する研究は、心理的支援を行う医療者にとって有用であり、ひいては *CLP* 者と家族の *QOL* の向上に資すると考える。

#### 3. 中枢カテコールアミン研究に有益な新規ノックインラットの開発

福島県立医科大学医学部・生体機能研究部門

西澤 佳代

カテコールアミンの一つであるドパミンは、運動機能や意欲、学習に関わる神経伝達物質である。パーキンソン病では、中脳の黒質にあるドパミン神経細胞の減少によって、運動機能異常や、意欲低下、学習障害が引き起こされる。また、60歳以上では人口100人あたり約1人と多くの患者がいる為、超高齢社会を迎えた日本にとって大きな社会問題となっている。我々の研究チームは、病気の原因解明や治療法の確立に有益な、*TH-Cre* ラットの開発に取り